

ウジミナス建設・操業開始期における通訳者

——日本鉄鋼業による対ブラジル技術移転（5）——

長谷川 伸

- I はじめに
- II 日系社員の役割に関する文献上の記述・評価
- III 通訳者の必要性とその不足
- IV 通訳不足問題の解決方法
- V 通訳業務上の困難
- VI おわりに

I はじめに

我々はこれまで、ウジミナス建設・操業開始期に大量に採用された日系社員に焦点をあて、彼らが「人から人への技術移転」において果たした役割を明らかにするための準備作業を行ってきた。具体的には、ウジミナスが日系人に求めている人材像と、その要求に叶う日系社員の大量採用を可能にした背景、および日系人のウジミナスへの入社理由を下記の通り明らかにした。

ウジミナスは一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる人材を日系人に求めていた。そうしたウジミナスの人材像に叶う層は、主としてブラジル生まれの第1世代である二世、幼少期に渡伯した移民である準二世によって構成される。この層は、主として二世の親の世代（戦前移民）の手によって学校あるいは家庭での日本語・ポルトガル語の学習機会が与えられたことにより、形成されてきたものである。しかも、移民50周年を迎えたばかりの1960年代初頭は、二世が労働市場に大量に参入してきた時期に重なってウジミナスが日本語もポルトガル語もできる二世を大量に採用するにはタイミングが良かった。同時に数は少ないが、戦後移民も供給源となったことにも注目すべきである¹⁾。

そうした日系人がなぜウジミナスに入社したのか。日本語とポルトガル語の両方ができる日系二世は日本のために働きたいから、当時苦境にあった戦後移民（一世）は給与が高いから、世代を問わず高卒以上の技術系の学歴と専門職務の経験を有している者は、入社前にすでに社

1) 長谷川 (2009), 66頁。

会的評価の高い職業（技師）に就いていたか妻子持ちであったが、ウジミナスからの要請により入社した、というおおよその構図を描くことができる²⁾。

では、そうしてウジミナスに入社した彼らは、入社後どのような役割を果たしたのか。ウジミナスの要請に基づいて入社した技師・技術員たちは、事務員・工長・作業員として採用された日系二世・戦後移民は、ウジミナス建設期・操業開始期にどのような役割を果たしたのか。これが文献でどのように記述されているかを明らかにし、文献上では最も言及されている通訳者としての役割について、そのありようを明らかにすることが本稿の課題である。

上記の本稿の課題を解決するために依拠するのは主として、公表されている関連文献と当時の日系社員に対して我々がこの間行ってきたインタビュー取材の記録である。今回利用するのは元日系社員8名のインタビューデータである。このインタビューはブラジルにおいて2002年から2010年にかけて行われた。

今回使用するインタビューデータ8名の内訳は下記の通りである（表1）。世代で見ると一世4名（うち戦後移民3名）、二世4名となっている。出生年で見ると、1920-24年2名、1930-34年1名、1935-39年3名、1940-44年2名となっている。一世4名についてみると、渡伯年は1929年1名、1950年代後半(1955-59年)3名となっている。渡伯形態で見ると単身2名、家族2名となっている。渡伯年齢は、5-9歳1名（いわゆる準二世）、15-19歳1名、20-24歳2名となっている。入社年齢で見ると、20-24歳2名、25-29歳4名、30-34歳1名、35-39歳1名となっている。入社時学歴は、大卒2名、高卒2名、中卒1名、小卒3名、入社時職位は、技師2名、技術員1名、作業員2名、事務員3名となっている。

表1 インタビュー対象者のプロフィール

イニシャル	出生年	世代	出生地	入社前居住地	渡伯年	渡伯年齢	渡伯形態	入社年	入社年齢	入社時学歴	入社時職位
IY	1922	一世 (準二世)	日本	サンパウロ州 サンパウロ市	1929	7	家族	1958	36	大卒	技師
HS	1924	二世	ブラジル	サンパウロ州 サンパウロ市	-	-	-	1958	34	大卒	技師
HK	1932	一世 (戦後移民)	日本	サンパウロ州 サンパウロ市	1955	23	単身	1961	29	高卒	技術員
KW	1935	一世 (戦後移民)	日本	ミナスジェライス州イタピリト	1957	22	単身	1962	27	小卒	作業員
JO	1936	二世	ブラジル	サンパウロ州 リンス	-	-	-	1962	26	高卒	事務員
MI	1936	二世	ブラジル	サンパウロ州 サンパウロ市	-	-	-	1962	26	小卒	事務員
MK	1941	一世 (戦後移民)	日本	サンパウロ州 リンス	1956	15	家族	1962	21	小卒	作業員
MS2	1949	二世	ブラジル	サンパウロ州ベ レイラバヘート	-	-	-	1969	20	中卒	事務員

2) 長谷川 (2012), 58頁。

なお、このインタビューデータは、インタビュー取材が可能で、かつ実際にインタビュー取材を行い、通訳業務についてまとまった聞き取りができたものを示したに過ぎない。したがって当然のことながら、構成比率には意味はない。一方で、インタビュー対象者のプロフィールが多様であることは、通訳業務が誰にどのように担われていたのかを知る上で有益であるので本稿にとっては好都合である。

本稿の構成は以下の通りである。まず、Ⅱにおいてほとんどの文献では日系社員の役割は通訳者・翻訳者とされていることを明らかにした後、Ⅲにおいて通訳者の必要性和その不足を明らかにし、Ⅳにおいてその通訳不足をどのように解決したのかを明らかにし、Ⅴにおいて日系社員の通訳業務上の困難を明らかにする。Ⅵは結論である。

Ⅱ 日系社員の役割に関する文献上の記述・評価

本章の課題は、ウジミナス建設・操業開始期当時の日系社員の役割が文献上どのように記述・評価されているかを明らかにすることである。

1 社史における記述・評価

まず社史をあたろう。1990年に出版されたウジミナス本社の社史Usiminas Conta sua Historia³⁾は本編と証言集によって構成されているが、日系社員の役割については記述が見あたらない。

ウジミナスに出資と派遣などを行う日本側の受け皿会社として1957年に設立された、日本ウジミナス株式会社はこれまでに2回、1969年と2008年に社史を発行している。そのうち、1969年に出版された『十年史』にはウジミナス建設・操業開始期の日系社員の役割については記述が見あたらない。ただし、建設上の問題点を示した箇所、下記の通り日系社員について触れている。「後進国特有のナショナリズムが強く、製鉄所の建設と操業はあくまでも自分達の手で行おうとする意欲が強いあまり、日本人の移民的流入を好まず、当初かなり入社した日系社員も特技を有する者を除いて、しだいにウジミナスから脱落していった」⁴⁾。

なお、この記述の直前で同じく建設上の問題点として「言語風俗慣習の相違がはなはだしく、とくに言語の問題では必要数の適格な通訳を確保することが困難であったため、ブラジル側に対し意志の伝達が的確に行われず、問題処理のタイミングを失うばかりか、ブラジル側のプライドを傷つけ感情的対立を生ずることもあった」⁵⁾と指摘されている。このことからすると日本ウジミナス（1969）は、通訳や日本とブラジルの間の文化ギャップを埋める役割として日系

3) Usiminas (1990).

4) 日本ウジミナス (1969), 263頁。

5) 日本ウジミナス (1969), 262頁。

社員が期待されていたが、その確保がままならず、ナショナリズムの影響もあって期待通りにはいかなかったとの認識しているように読める。

日本ウジミナス五十年のあゆみ編集委員会が編集し、日本ウジミナスが2008年に出版した『日本ウジミナス五十年のあゆみ：鉄は日伯を結ぶ』においては、ウジミナス建設・操業開始期の日系社員の役割について下記の記述があるのみである。「派遣者とブラジル人との間には言葉の壁があった。日本国内ではポルトガル語教育には限界があり、意思疎通は困難だった。そこで、通訳や作業補助者として雇った日系人の中には、ピストルを持った流れ者がいたりして、別の問題を起こした。とはいえ、日系人の存在は非常に大きく、派遣者とブラジル人を結びつける役割を果たしたことは間違いない⁶⁾とされている。

2 日本からの派遣者による記述・評価

八幡製鐵からウジミナスに製鉄所調整部調整掛長として1961年10月から1964年12月まで派遣された阿南惟正が2007年に著した『鉄の絆：ウジミナスにかけた青春』には、日系社員の役割について以下のように記述されている。「仕事の面では、繰り返すようだが、言葉の障壁が一番の悩みであった。それだけに二世の人達のポルトガル語は私達が一番頼りにしたもので、これも時間の経過とともに、お互いの考え方が理解出来てくると更に効果が上がっていった⁷⁾。「いずれにせよ、これ等日系の人達の存在がさまざまな形で派遣者を支え、派遣者の方もこの人たちの育成に努力し、両々相まってウジミナスの建設が進められてことはきわめて重要な事実である⁸⁾。

八幡製鐵からウジミナスに本社総務部調整課長として1963年6月1日から1966年10月8日まで派遣された中川環は「操業始35周年の記念すべき年にあたり、派遣者の生々しい体験を記録に残して、ウジミナスプロジェクトの確かな歴史を後世に語り継いでおきたい⁹⁾として当時のウジミナスへの派遣者が編集し、1997年に出版された『ウジミナス回想録』の「発刊にあたって」で「特筆すべきは、ブラジル現地採用の日系社員約400名が、日本人とブラジル人を結ぶパイプ役として大きな役割を果たしてくれたことであります。この方々の献身的な協力と努力がなければ、成功は覚つかなかったといっても過言ではありません¹⁰⁾。

この『ウジミナス回想録』に収録されている「ウジミナス小史」では「両者（引用者註：日本からの派遣者とブラジル社員）の間にあって通訳として意思疎通をはかることはもとより、日常業務を進める上で現地採用の日系社員（日系ブラジル人の一世および二世ならびに戦後渡

6) 日本ウジミナス五十年のあゆみ編集委員会 (2008), 51頁。

7) 阿南 (2007), 188頁。

8) 阿南 (2007), 189頁。

9) 中川 (1997), 頁番号記載なし。

10) 中川 (1997), 頁番号記載なし。

航した日本人)の果たした役割はきわめて大きいものがある」とし、日系社員の「献身的な協力なくしてこの事業は成り立たなかった」と高く評価した上で、下記の通り記述している¹¹⁾。

日系社員の役割とされた「通訳の仕事は業務に関する日常会話、打ち合わせ、連絡が主たるものであったが、当初は、技術仕様の翻訳作業が主体となった」。また「次に資料をもとに教育訓練が待っていた。自分自身がはじめにそれぞれの工場作業を修得した上で、ブラジル人と一緒になって派遣者の指導のもと、現場での実習に従事した」としている。この現場で「やってみせる」モデルは、現場で作業にあたる作業員、あるいはその作業を指揮する工長が果たしたと考えるのが妥当であろう。同時に日系社員は「派遣者とブラジル人との間の指導の仲介役、又はトラブルの際のとりなし役としての活動が期待されており、正に潤滑油的な辛い立場であった」としている¹²⁾。

これとは別に「通訳としてではなく、ブラジルの大学および専門学校出身の技術者もごく少数であったが活躍しており、エンジェネイロとして、日本へも留学研修をし、帰国後、課長補佐に就任し、派遣者とともに専門家として操業に寄与された」との記述もある¹³⁾。

ウジミナス回想録編集グループ（1997）で示されているのは日系社員の役割は、通訳者、翻訳者、現場でのモデル、指導の仲介役、トラブル時のとりなし役であった。同時にエンジェネイロ＝技師として活躍した日系社員があったとも指摘している。

3 第3者による記述・評価

1980年に出版されたブラジル日本移民70年史編纂委員会（編）『ブラジル日本移民70年史』には「日本語とポルトガル語のコミュニケーションの不備は初めからつきまとった。このギャップを埋めたのは日系の二世であった。彼等は多く、サン・パウロ、リオの大学を卒業した人々で、有利な機会を放棄してミナスへやって来たのである。建設段階でウジミナスで働いた二世はおよそ50名、日本側の記録によれば、全て優秀なブラジル人であったと評価されている」との記述がある¹⁴⁾。

1974年に出版された中川靖造による『ウジミナス物語』は、1950年代後半か60年代前半のウジミナス・プロジェクトを扱い、主として日本からの派遣者や日本側の関係者による証言で構成されたノンフィクションである。この中川（1974）では「ほかの日系のことは知らないが、ウジミナスにいた日系は実に優秀だった」¹⁵⁾との日本側幹部の言葉を紹介しつつ「もう一つ特筆しておかなければならないことは、ウジミナスが現地で採用した日系職員の存在とその役割

11) ウジミナス回想録編集グループ（1997）、36-37頁。

12) ウジミナス回想録編集グループ（1997）、36-37頁。

13) ウジミナス回想録編集グループ（1997）、36頁。

14) ブラジル日本移民70年史編纂委員会（1980）、120頁。

15) 中川（1974）、130頁。

である』¹⁶⁾としている。

4 小括

本章の課題は、ウジミナス建設・操業開始期当時の日系社員の役割が、文献上どのように記述・評価されているかを明らかにすることであった。明らかになったことは下記の通りである。

第1に、検討した全ての文献において日系社員が通訳者・翻訳者として重要な役割を果たしたと評価されている。第2に、ウジミナス回想録編集グループ(1997)によれば、通訳者・翻訳者以外には、日系社員は指導の仲介役、トラブル時のとりなし役、日系の工長・作業員は現場でのモデルを示す役割があった。第3に、通訳としてではなく技師として活躍した日系社員があったとされているが、ブラジル人技師にはない日系技師ならではの役割が明らかにされているわけではない。第4に、日系社員の役割についての記述が限られており、最も詳しく述べているウジミナス回想録編集グループ(1997)であってさえ、日系社員が与えられた役割をどのように果たしたのかは明らかでない。

以上より、文献上ではウジミナス建設・操業開始期当時の日系社員は、まずは通訳者・翻訳者の役割を果たしたとされ、その他に指導の仲介役、トラブル時のとりなし役、日系の工長・作業員は現場でのモデルといった役割を果たしたとされている。ただし、技師に限らず日系社員が与えられた役割をどのように果たしたのかは明らかでない。

そこで以下では、上記の役割のうち最も取り上げられている、通訳者としての役割を日系社員がどのように果たしたのかを明らかにする。なお、他の役割については、別稿に期したい。

Ⅲ 通訳者の必要性和その不足

日系社員は通訳者としての役割をどのように果たしたのか。このことを検討する前提として、ウジミナス建設・操業開始期当時、なぜ通訳者が必要とされたのか。これが本章の課題である。

1 日本語・英語・ポルトガル語：言語の問題

日本からの派遣者とウジミナス社員が英語などの共通する言語に通じていれば、あるいは、日本からの派遣者がポルトガル語に堪能であれば、日本語・ポルトガル語の通訳者を必要としないことは論を待たない。では、現実はどうであったか。まず日本からの派遣者とウジミナス社員が英語などの共通する言語に通じていたかについて、前出の阿南(2007)は以下のように述べている。「英語を使えばいいといわれるかもしれないが、当時ブラジルではインテリでも案外英語は話せない。どちらかといえばフランス語を学ぶ人が多かったようである。それに対

16) 中川(1974), 127頁。

して私達日本側も、英会話を流暢に話せる人は製鉄所には少なく、きわめて不自由なものであった。私の場合、同僚のマウリシオ掛長、後から係長補佐として来たオランダ君は英語が判ったので、簡単な内容については意思疎通をすることが出来たのは恵まれた方であった¹⁷⁾。

こうした当事者の証言から、日本からの派遣者とウジミナス社員は英語などの共通する言語に通じていたわけではなかったと考えられる。では、日本からの派遣者はポルトガル語に堪能であったか。この問いに答えるには、派遣前にどの程度ポルトガル語を学んだのか、派遣された現地でどの程度ポルトガル語を学んだのかを明らかにすることが有益であろう。

2 派遣者の派遣前におけるポルトガル語教育・学習

日本からの派遣者は、派遣前にどこでどの程度ポルトガル語を学んだのか。先に示した『日本ウジミナス五十年のあゆみ：鉄は日伯を結ぶ』が指摘する「日本国内ではポルトガル語教育には限界¹⁸⁾があったとはどういうことだったのか。この点については、限られた断片的な資料から推測する他はない。

1961年5月から1963年11月まで、八幡製鉄所教育部で嘱託講師であったTK氏は、350人以上の派遣者に、会話と発音を中心としたポルトガル語の授業を、派遣者1名につき150時間程度行ったとしている¹⁹⁾。一方で、八幡製鉄所社内報『くろがね』は、1961年12月にウジミナスに派遣される作業長(技師補佐)38名のポルトガル語教育について、以下のように述べている。「今度派遣されることになった技師補佐38名のうち34名は、今年3月15日開始、8月30日卒業式を行った『第11期作業長養成教育』を受けた人々で、他の4名はすでに作業長となっている人達。9月1日からは整員課所属となって、1日置き半日間の、ポルトガル語(ブラジル国語)講座および、旧所属を中心にしてミナス現地における技術指導に必要な実習を行ない、また広範囲な知識を必要とするため、社外実習にも参加した。…また先月小倉で上映されたフランス映画『熱風』では登場人物がポルトガル語を使うというので、ほとんどの人が映画を観て自分の語学力を試すという、ポルトガル語にも熱心さをみせているだけに、メキメキ上達しているという²⁰⁾。この記述から、作業長(技師補佐)38名は、1961年9月1日から11月中下旬まで1日置き半日間のポルトガル語講座を受けたと推測されるが、これは上記TK氏の証言と整合的である²¹⁾。

17) 阿南(2007), 81頁。この他に、ウジミナス社員で大卒のエンジニアがドイツ語はできるが英語はできないとしている例がある(植村, 1997年, 79頁)。

18) 日本ウジミナス五十年のあゆみ編集委員会(2008), 51頁。

19) TK氏, 2015年3月2日, 2015年3月4日。

20) 「ミナス要員大挙渡伯, 26日体育館前広場を出発」(1961)。

21) 「当時製鐵所では常昼勤務8時~16時の他に作業現場では三交代勤務形態をとっており、甲番6時~14時、乙番14時~22時、丙番22~翌朝6時の勤務で毎週交代番が替わっていく。そのような状況のなかで、週6日間、毎日8時間の現場での重労働の前後での3時間におよぶ勉強をなすとげた」(井上義祐(2001), 〃

この点に関して、作業長（技師補佐）ではないが、大卒技師の派遣者は以下のように述べている。「渡伯前に週に1-2回のペースで3-6ヶ月間にわたってポルトガル語を八幡で学んだ」²²⁾。「訪伯前に、現場で実際の指導に当たる作業長クラスの人たちのためのポルトガル語講座に1ヶ月ほど出たが、聞きかじった『ヴァモス・パセアル・コミーゴ＝一緒に散歩しましょう』が難なく通じて、大いに気を良くした」²³⁾。

一方で、派遣前のポルトガル語の学習機会はほとんど与えられなかったとの証言もある。1961年から64年までウジミナスに派遣されたKT氏は「私は、東京本社にいましたので、しっかりしたポ語（引用者註：ポルトガル語）の教室がなく、挨拶などの基本会話が少しできる程度で、渡航して居ります。ポ語の先生は、ウジミナスから八幡製鉄に、研修に来ていた二世のY（引用者註：原文では実名表記）技師でした。教材は、Y（引用者註：原文では実名表記）先生が自分で作った会話中心のガリ版刷りでした。出向の辞令が出たのが4月で、6月には渡航しましたから、十分な準備ができなかったのも事実です」としている²⁴⁾。辞令から渡航まで1ヶ月余りでは、ポルトガル語学習に時間を割く余裕はほとんどなかったと考えられる。この証言を「日本人派遣者が現地人との意志の疎通を欠いた原因のひとつに、ブラジルの国語であるポルトガル語が話せなかったことがあげられる。というのも、初期の派遣者は急に日日出向を命ぜられ、これといった準備もせず赴任した人が多かったからである」²⁵⁾との記述と合わせて考えると、こうしたケースは相当数あると推測される。

KT氏と同じく1961年から64年まで派遣されたTB氏は「61年春、ウジミナス派遣の内示があったのですが、ブラジルが、また派遣先がどこか分からずに困りました。したがって、ポ語（引用者註：ポルトガル語）はたまたまた八幡製鉄所にウジミナスから研修に来られていた日系二世のIY（引用者註：原文では実名表記）に何回か指導していただいたものの、薄い『日葡辞書』を求めるのが精一杯でした。ですから、派遣の初期の私たちのグループ、多くの八幡製鉄所からの派遣者はブラジルそのものも、その文化も、ましてやポ語についての学習は…『本人任せ』でした。八幡製鉄所教育部のTK（引用者註：原文では実名表記）のおっしゃるようなポ語研修のことなどは全く知りませんでした」としている²⁶⁾。この証言からは、とくに初期（1961年まで）にはポルトガル語学習が本人任せであった場合も見られたことが推測される。なお、上記の2つの証言に現れる、研修に来ていた日系の技師は同一人物であり、長谷川（2012：54）

120頁、註24)とあるので、「半日間」を4時間、週6日勤務とみなして、1961年9月1日から11月24日までの平日と土曜は73日だから、1日置き半日間＝2日で4時間＝1日2時間として、73日×2時間＝146時間と推測。

22) 元新日鐵技術協力事業部専門部長・K氏、2001年11月26日。

23) 武末（1997）、135頁。

24) KT氏、2015年3月30日。

25) 中川（1974）、34-35頁。

26) TB氏、2015年4月11日。

で言及したIY氏である。

こうして見てくると、派遣前のポルトガル語教育を受けられない派遣者も相当数存在し、教育を受けられたとしても、そのゴールは日常会話レベルであったと推測される。このことは、前出の阿南（2007）による記述によっても補強されよう。派遣前に日本で「仕事の合間を縫ってポルトガル語（ブラジル国語）の研修を受け」²⁷⁾ ていたが、それでも「言語の障害は想像を絶するものがあった」として、阿南（2007）は以下のように述べている。「簡単な日常会話は、単語の羅列と手まねや絵で通じて、少し話が込み入り、テクニカルタームが入ってくるとさっぱり通じなくなる」²⁸⁾。「ブラジル人と電話で話すことは、通訳を入れられないので極めて難しく、いちいち直接話に行かなければならない」²⁹⁾。これが「日本国内ではポルトガル語教育には限界」³⁰⁾があったとされている事態であろう。

3 派遣者の現地におけるポルトガル語教育・学習

日本からの派遣者は、ブラジルの公用語であるポルトガル語を現地でどの程度学んだのか。この点については以下の証言がある。

「渡伯後は家庭教師を2人（弁護士とエンジニア）雇って週4回、夜に教えてもらい、これを2年間続けた。そのため今でも政府の高官とやりとりできる格調の高いポルトガル語を話すことができる」³¹⁾。

「大学院生を家庭教師に頼むと週3回だけというので、会社の帰りに二人の先生に家に交互に通い、週6回欠かさず、6ヶ月集中的に勉強した。こうして拙いながら、水野総務部長（後に新日鉄副社長）が会議に出席される際の、通訳をさせていただけりようになった」³²⁾。

「周辺の事情からもブラジル語が出来なければ仕事ができないことがはっきりしてきた。幸い、ブラジル語の本や辞書を沢山持参していたので、猛烈に勉強を開始した。単語は辞書を食べるようにして覚えた。半分はすぐ忘れても半分は残る。動詞の変化は、部屋の壁に書いて貼り、繰り返して覚えた。夜は、宿舍のロビーに数名が集まり、坂本さん（引用者註：日系二世のエンジニア）を先生に雇って日常会話を勉強した。技術用語は、工業高校のテキストを入手し、それにより覚えた。丁度、ブラジル調達の電気資材（照明器具、低圧電線、端子など）の購入仕様書をブラジル語で作成する仕事があり、これを引き受けた。お陰で、3ヶ月程で通常

27) 阿南（2007），24頁。

28) 阿南（2007），80頁。

29) 阿南（2007），81頁。

30) 日本ウジミナス五十年のあゆみ編集委員会（2008），51頁。

31) 元新日鐵技術協力事業部専門部長・K氏，2001年11月26日。K氏については、長谷川（2002）を参照のこと。

32) 武末（1997），135頁。

の業務は何とかブラジル語を駆使して行うことができるようになった』³³⁾。

上記3つの証言はいずれも、派遣前にポルトガル語の教育を受けた者であっても、ポルトガル語で日常会話がやっとできるレベルであり、派遣後ポルトガル語で業務を行うには不十分であったことを示している。同時に、現地で業務時間外にポルトガル語の家庭教師を雇うなどの個人的な努力を、数ヶ月から数年にかけて重ねることが可能であった派遣者は、ポルトガル語での業務が遂行できるようになったことを示している。逆に言えば、派遣後ポルトガル語で業務を遂行するためには、比較的恵まれた条件と相当程度の個人的な努力が必要であり、家族を連れて赴任した者などその条件がない者も相当数いたことを示している。

4 小括

本章の課題は、ウジミナス建設・操業開始期当時、なぜ通訳者が必要とされたのか明らかにすることであった。

第1節では、日本からの派遣者とウジミナス社員は英語などの共通する言語に通じていたわけではなかったことが示唆された。第2節では、派遣前のポルトガル語教育を受けられない派遣者も相当数存在し、教育を受けられたとしても、そのゴールは日常会話レベルであって、派遣後ポルトガル語で業務を行うには不十分であったことが明らかとなった。第3節では、派遣後ポルトガル語で業務を遂行するためには、比較的恵まれた条件と相当程度の個人的な努力が必要であり、その条件がない者も相当数いたことが明らかとなった。ここに通訳の必要性があったのである。

以上より、ウジミナスの建設・操業開始期当時、日本側とブラジル側に共通する言語がなく、日本側の派遣前のポルトガル語教育も業務を行うには不十分であり、派遣後もポルトガル語学習の機会が乏しかったため、通訳者が必要とされたと考えられる。

IV 通訳不足問題の解決方法

本章の目的は、ウジミナス建設期・操業開始期における通訳不足問題をどのように解決しようとしたのかを明らかにすることである。

1 どのような意味で通訳が不足していたのか

通訳者の必要性は認められたが、その必要を満たす通訳者は果たして確保できたのであろうか。第2章第1節で示したように日本ウジミナス(1969)は「必要数の適格な通訳を確保することが困難であった」とし、ウジミナス回想録編集グループ(1997)は、操業準備にあたる日

33) 中村(1997), 119頁。

本からの派遣技術者が直面した致命的な問題として「日本から持参した作業標準書，図面等技術資料のポルトガル語翻訳作業遅延，ひいてはブラジル人要員の教育訓練の遅れ」が生じたとし，その原因として通訳不足を挙げている³⁴⁾。同様に，前出の阿南（2007）も「現場の技術，作業を教える人々の苦労は一層のものがあつた。まして通訳の人数は少なく，製鉄業に通じている人はほとんどいないので，この問題は予想されていたとはいえ，大変なものであつた」としている³⁵⁾。

これらの記述から，ウジミナス建設・操業開始期においては，必要を満すだけの「適格な」「技術知識を持った有能な」通訳を確保することができなかつたと見ることができよう。その原因について，先に見た中川（1974）は「当初，日本の幹部は現地で日系人の通訳を雇えば，言葉の障害は克服できると単純に考えていた。ところが，勤務地が山間僻地の建設現場という悪条件がわざわざいし，技術知識を持った有能な通訳の確保が思うようにできなかつた」としている³⁶⁾。この指摘は，長谷川（2012）が下記の通り明らかにしたことと整合的である。「ウジミナス入社を決める際の最大の懸念材料は彼らにとって，当時のミナス・ジェライス州ベロ・オリゾンテ/イパチंगाは遠く未知の土地であつたことである。こうした懸念は出自や学歴に関わりなく共通してあるが，とくに入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）に就いていた者や妻子があつた者にそうした懸念が強かつたようである」。「技術知識を持った有能な通訳」であれば，すでに社会的評価の高い職業に就いていたか，そうした就職口に困らない可能性が高い。したがって，そうした人材をウジミナスが確保することが困難であつたと考えられる。

2 プロの通訳者とバイリンガルによる通訳

本節では，当時不足していたとされる「適格な」「技術知識を持った有能な」通訳について立ち入って検討したい。何をもって「適格」とするのか。何をもって「有能な」とするのか。「適格な」としたのは日本ウジミナス（1969）であり，「技術知識を持った有能な」としたのは中川（1974）であるが，いずれもそれ以上の言及はなく，この問いに答えてはいない。そこで，この問いに通訳学の文献に依拠して答えることにしよう。

そもそも通訳とは〈翻訳〉（翻訳一般，広義の翻訳）の一形態であり，異言語での最初にして最後の訳が，起点言語における発話の一回限りの提示を基に産出されることとされ，通訳は「今，ここで」言語と文化の障害を超えてコミュニケーションに参加したい人々のために行われるという³⁷⁾。こうした通訳を行ってきた者は，歴史的には二言語話者（バイリンガル）であり，その通訳行為は伝達者，ガイド，交渉人などとしての仲介機能と密接に関係づけられてき

34) ウジミナス回想録編集グループ（1997），34-35頁。

35) 阿南（2007），80頁。

36) 中川（1974），101-102頁。

37) ポエヒハッカー（2008），4-5頁。

た³⁸⁾。それはすなわち、特別な訓練を受けていないバイリンガルによる通訳（素人通訳lay interpreting, 訓練なしの通訳natural interpreting）であり、これは今日でも一般に見られることである³⁹⁾。

しかし、20世紀に通訳職の専門化が進展するにつれてようやく、その役割が具体的な用語で成文化され、職業倫理と実践における不可欠な部分となった⁴⁰⁾。こうして成立したのが通訳職（プロの通訳者）である。したがって、総じて必要とされるタスクが「ふつうの」バイリンガルに期待される能力以上のものを要する場合にはじめて、通訳の仕事がプロに依頼されることになる。つまりプロの通訳者とは、（関連する文化やテーマ内容についての）専門知識を有し、（記憶術、ノート・テイキング、同時通訳などの）技能を身につけ、誠実性や信頼性などの資質を備えている者と定義づけられる⁴¹⁾。

この通訳学の知見によれば、通訳（者）は一般に大きく2つに分けられる。すなわち、プロの通訳者とバイリンガルによる通訳（素人通訳、訓練なしの通訳）である。このことは、当時ブラジルで発行されていた邦字新聞にウジミナスが投稿した日系社員募集広告において、日本語・ポルトガル語両方の日常会話ができる事務員・技術員と区別し、なおかつ、事務員・技術員よりも良い待遇を示して通訳を募集していた事実と符合する⁴²⁾。つまり、ウジミナスはプロの通訳者を通訳として、バイリンガルによる通訳（素人通訳、訓練なしの通訳）ができる者を事務員・技術員として雇用しようとしたと考えられる。したがって、「適格な」「技術知識を持った有能な」通訳とは、ここに述べられている「プロの通訳者」をまずは指していると考えるのが自然である。「通訳不足」と言った場合、まずこのプロの通訳者を通訳として雇用しようとしたが、思うように採用できなかった事態を指していると考えられる。

では、当時ウジミナスに通訳として採用された「プロの通訳者」は何名いたのだろうか。公表文献で確認できる「プロの通訳者」（通訳職）と思われる名前は、中川秀幸氏と榛葉隆一氏の2名である。中川秀幸氏については阿南（2007）にこう書かれている。「日本側としても、この状況を看過できず、日系ブラジル人の採用を拡大することとし、[1962年]4月に入って井上所長自ら、サンパウロ州奥地のリンス、マリリアを訪れることを決定した。私は、通訳の中川秀幸氏、ローリバル要員掛長、7人の侍の一人で日本語に堪能なプルデンテ原料処理課長補佐とともに先行し、まずリンスに乗り込んだ⁴³⁾。榛葉隆一氏については『日本人ブラジル交流人名事典』に以下の記述がある。「1917（大正6）年1月～1995（平成7）年1月。公証

38) ポエヒハッカー（2008）、177-178頁。

39) ポエヒハッカー（2008）、20-21頁。

40) ポエヒハッカー（2008）、178頁。

41) ポエヒハッカー（2008）、21頁。

42) 例えば「ウジミナス操業近し」（1961）。長谷川（2009）の表1も参照のこと。

43) 阿南（2007）、84頁。

翻訳人。1928（昭和3）年、バストス移住地に開設当初の移住家族として入植後、公証翻訳人となる。マカブ電力会社、ウジミナス等で活躍。リオ日伯文化協会副会長、ブラジル東京銀行顧問をつとめる。日本国より勲四等瑞宝章（1987年）を受章⁴⁴⁾。中川秀幸氏と榛葉隆一氏の他には、1970年にウジミナス技術管理部が設けた通訳グループに発足当初から属していたFK氏によると、1950年代から60年代にかけて、米倉照夫氏、榊パウロ氏（ペロオリゾンテ勤務で日本側の技術取締役の通訳として）、西尾励氏（東京勤務）、中川繁年氏（イパチング勤務で製鉄所長の通訳として）の4氏がいたという⁴⁵⁾。

こうしたことからすると、ウジミナスにはその建設・操業開始期にあっては日本から派遣された取締役や製鉄所長などの役職者付き通訳を含む「プロの通訳者」（通訳職）として6名が在籍していたと考えられる。もちろん、当時この6名の他に「プロの通訳者」（通訳職）がウジミナスに在籍していた可能性はあるだろうが、その数がたとえ倍の12名であったとしても、1958年から1966年までの間に日本ウジミナス経由で日本からウジミナスへ派遣された者が500名以上にのぼったことを考えれば、通訳不足という事態には変わりがないと言えよう⁴⁶⁾。

3 プロの通訳者の不足をどのように補ったのか

では、このプロの通訳者を通訳として雇用しようとしたが、思うように採用できなかった問題（通訳不足）をウジミナスはどのように解決しようとしたのか。プロの通訳者の不足をどのように補ったのか。その一つの証言を示そう。

1932年に日本で生まれ、大学を中退して1955年に23歳で渡伯、数年間の工場勤務を経て1961年にウジミナスへ入社し、技術員として建設局製鉄機械建設部に配属されたHK氏はこう述べている。毎日開催される建設局製鉄部の会議にも出席した。この会議は、課長（しばしば）、掛長、関係の業者、操業担当者など20名ほど（部長がくるときは30名以上）が出席し、このうち日本人は電機、土木、機械、築炉などの5人ほどで、あとはブラジル人であった。この会議の通訳は、日系技師の灰原氏が担当していたが、別の仕事もしていて忙しかったので、HK氏が通訳をやってみるよう言われた。HK氏は最初は断ったが「いいからやれ」と言われて、この会議の通訳をするようになった。HK氏が会議の通訳をししばらく続けていると、灰原氏は会議に参加しなくなった。「努力以上に圧力がかかってきた。その圧力に応えた。会議の通訳をしていた当時は毎日が嫌だった。逃げ出したかった」⁴⁷⁾。

「入社翌日から、現場を見とかんといかん。とにかく、自分の時間が持てた現場ではなかった」。そのくらいに周囲の日本人も少なかったし、現場にプロの通訳はいなかった。現場に、

44) パウリスタ新聞社（1996）、129頁。

45) FK氏、2002年3月13日、2015年9月17日。

46) 日本ウジミナス（1969）、第2部109頁。

47) HK氏、2008年8月20日、2010年8月26日。

会議に、通訳にとひっぱりまわされた。この当時は、朝から晩まで通訳業務が入っており、帰宅してシャワーを浴びることすらおっくうになるほどだった。こうした生活は数ヶ月続き、次の通訳（二世）担当者に引き渡すまで続いた⁴⁸⁾。

なお、ここに出てくる灰原氏とは、1925年に日本で生まれ、1952年にサンパウロ大学理工学部（Escola Politécnica）を卒業して土木技師となり、1958年にウジミナスに入社した灰原日出夫氏のことである⁴⁹⁾。

この証言は、プロの通訳の代わりにまずは日系技師、次に日系の技術員に通訳を担当させたことを示している。同時に、通訳を担当した日系技師と日系技術員に、相当の無理をさせていたことも示している。つまり、このケースでは日系技師は、技師としての仕事の傍らで、通訳の訓練を受けていないにもかかわらず重要会議での通訳をせざるをえず、一方でブラジルに来てまだ5-6年の日系技術員は、会議の場や現場で全日通訳として働かざるをえなかったと考えられる。

4 通訳に動員された日系技師

このケースでまず注目すべきは、数少ない貴重なブラジルの大卒日系技師が通訳に駆り出されていたことである。ブラジルの大学を卒業した日系技師が通訳の役割を果たしたとの証言は他にもある。長谷川（2012：54）でプロフィールを示した日系一世（準二世）でブラジルの大学を卒業した土木技師のIY氏は、角が立たないように絶えず気を使い、外交的、親切に、丁寧に通訳した⁵⁰⁾。もちろん、IY氏は技師としての仕事もしていた。日本に技術研修に行く前（1958年12月から1960年10月）までは、設計図についてNB（ブラジルの規格標準）との整合性をチェックし、おかしなところ、わかりにくいところがないかを点検して現場に渡す、建設設計管理の仕事をしていた。設計図にはない付属の建物（例えば臨時のポンプ場）の構造計算をしたこともあったという⁵¹⁾。

ブラジルの大学を卒業した日系技師が、通訳の役割を果たしたのは理由がある。それは、事務員や作業員として雇用された日系社員よりも、日系技師の方が通訳としての能力が高いためである。もちろん、日系技師であっても、通訳としての訓練を受けているわけではないのだから、バイリンガルによる通訳（素人通訳、訓練なしの通訳）であることには変わりはない。しかし、通訳対象の専門知識を有する＝「技術知識を持った」という点では、プロの通訳者に匹敵あるいは凌駕するであろう。その点で、長谷川（2009）、長谷川（2012）で明らかになった

48) HK氏, 2010年8月26日, 2010年9月6日。

49) 「ウジミナス採用日系職員紹介（1）」(1961)。“Homenagem aos 100 primeiros engenheiros nikkeis formados no Estado de São Paulo” (2008). p.28.

50) IY氏, 2006年8月28日, 2008年8月9日。

51) IY氏, 2006年8月28日。

出自と学歴を考えれば、工場勤務経験や工学（技術）を学ぶ機会に恵まれていたわけではない日系の事務員や作業員とは大きく異なる。同時に、ポルトガル語で工学を学び、ブラジルの大学を卒業している日系の技師が、ポルトガル語の運用能力の点でも秀でていることは間違いのないであろう。つまり、彼ら日系技師たちは「適格な」「技術知識を持った有能な」通訳に最も近い存在だったのである。

しかし、ここで想起されるべきは、第1章において示した「通訳としてではなく、ブラジルの大学および専門学校出身の技術者もごく少数であったが活躍しており、エンジェネイロ（引用者註：技師のこと）として、日本へも留学研修をし、帰国後、課長補佐に就任し、派遣者とともに専門家として操業に寄与された」⁵²⁾との記述もあるように、彼らは通訳としてではなく、技師としてウジミナスに入社し、日本での技術研修にも派遣されて技術移転の受け手として重要視されていたのである。もちろん、こうしたブラジルの大学を卒業した日系技師の採用にウジミナスが苦勞しなかったのであれば、彼らに通訳を兼務させることは問題がないかもしれない。しかし、実際は長谷川（2012）で明らかになったように、日系の技師と技術員は特に不足していた。ということは、ウジミナスにとって彼らに通訳を兼務させることは、苦澁の選択であったと考えられる。

5 小括

本章の目的は、ウジミナス建設期・操業開始期における通訳不足問題をどのように解決しようとしたのかを明らかにすることであった。

第1節では、必要を満たすだけの「適格な」「技術知識を持った有能な」通訳をウジミナスが遠隔地・地方にあったため確保することができなかったと見られるとした。第2節では、「通訳不足」と言った場合、まずプロの通訳者を通訳として雇用しようとしたが、思うように採用できなかった事態を指していると考えられるとした。第3節では、日系技師は、技師としての仕事の傍らで、重要会議での通訳をせざるをえず、一方でブラジルに来てまだ5-6年の日系技術員は、会議の場や現場で全日通訳として働かざるをえなかったと考えられるとした。第4節では、不足していた数少ない貴重なブラジルの大卒日系技師が通訳を兼務させることは、ウジミナスにとって苦澁の選択であったと考えられるとした。

以上のことからわかることは以下の通りである。ウジミナスは、プロの通訳者を雇用しようとしたが、ウジミナスが遠隔地・地方にあったために思うように採用できなかった。そのために、不足していた数少ない貴重なブラジルの大卒日系技師に通訳を兼務させることは、ウジミナスにとって苦澁の選択であったが、彼らは日系技術員とともにプロの通訳者並みに働かざるをえなかった。

52) ウジミナス回想録編集グループ（1997）、36頁。

V 通訳業務上の困難

第4章第3節に示したHK氏による証言は、プロの通訳の代わりにまずは日系技師、次に日系の技術員に通訳を担当させ、相当の無理をさせていたことを示していた。では、そうした通訳業務上の困難はいったい何であり、それにどのようにバイリンガルによる通訳（訓練なしの通訳・素人通訳）としての日系社員が立ち向かったのか。本章の目的は、これを明らかにすることである。

1 通訳のための事前準備

1936年にサンパウロ州バストス生まれ、1962年ウジミナス入社し、事務員として本社技術部に配属されたMI氏はこう述べている。事前準備なしの会議（政府間の会談）や講演会の時は一番難しかった。「知っているだろう」「できるだろう」と判断されて事前準備なしで通訳をせざるをえず、非常に困った。恥ずかしい目にもあった。とくに目上の人に対する尊敬表現が難しかった。講演内容が直前にがらりと変わったときに「私はやりません」といった友人（社員）もいた⁵³⁾。

また、前述したKW氏もこう述べている。通訳で苦勞したことは、自分の担当分野ではない工場に初めて派遣された場合、予習の時間も与えられないので、1週間から10日間は大変だったこと。専門用語が相手に通じないことがある。通訳の配置は上司（ブラジル人）が決める。その上司は、日本人は同じような顔をしているから誰でもどこに配置しても同じだと考えているようで、通訳本人にとって初めての工場であっても、そうした事前準備の時間を与えないのだ。通訳グループでの情報交換の機会や勉強会の時間もなかった⁵⁴⁾。

さらに、1949年サンパウロ州ペレイラバートに生まれ、同郷の友人の薦めで1969年に事務員（タイピスト）としてウジミナスに入社し、1975年から通訳グループに配属となったMS2氏はこう述べている。製鉄所の各部門を転々としなければならないので、その部署に特有の専門用語は忘れてしまうので、勉強し直す必要がある。元々英語やドイツ語などから来た日本語のカタカナ用語にも苦勞した。使っている本人（日本人）も元の綴りがわからない場合が多いので、調べようがなかった。また、現場用語（その現場にしか通用しない用語、極端な場合、同じ製鋼工場でも八幡と君津で異なる）にも困った。さらに、その人の独特の言い回し（その人が作った言葉）にも困った⁵⁵⁾。

加えて、1962年にウジミナスに入社し、事務員として工務部電気整備課電気整備掛に配属さ

53) MI氏, 2010年8月6日。

54) KW氏, 2010年8月18日。

55) MS2氏, 2010年8月10日。

れた日系二世のJO氏（長谷川，2012：47）はこう述べている。ウジミナスに入社して、ポルトガル語で困ったことはない。ただし、冶金、機械、電気などの専門用語がわからなくて苦労した⁵⁶⁾。

これらの証言はいずれも日系事務員によるものであるが、部署に特有の専門用語を学んだり、会議や講演会の通訳にあたって事前に資料を読み込んだりする事前準備の時間が与えられなかったケースが少なからずあったことを示している。こうした事前準備ができないことはプロの通訳であってもストレスであるが、ましてや通訳としての訓練を受ける機会と工学（技術）を学ぶ機会に恵まれなかった技師以外の日系社員にとって、これは相当のストレスであったことは想像に難くない。

通訳者に事前準備が十分にできないという困難をもたらした背景には、先述の通訳不足とともに「準備なしでも通訳はできるであろう」との通訳に対する過小評価があったと考えられる。通訳業務が責任が重いにもかかわらず、正当に評価されない（過少評価されている）ことを、1962年にウジミナスに入社し、作業員としてコークス工場に配属された戦後移民（一世）のWK氏（長谷川，2012：51-52）はこう述べている。通訳は「バカな仕事」「一番損な仕事」だと思っている。なぜなら「両方の舵取りをしないといけない」「うまくいかない場合には通訳のせいにされる」から。ブラジル人はあけすけにずけずけと言うので、通訳をしている時に沸き上がる怒りをぐっと噛みしめることがある⁵⁷⁾。こうした通訳に対する過少評価はどこからきているのだろうか。以下、節を改めて検討しよう。

2 通訳観としての直訳主義

イパチンガ（製鉄所）における日本側の社内報『時報いばちんが』1965年9月30日付記事「機械に成ろう」で、ブラジルの大学を卒業した技師で、当時工務部長補佐であった鈴木厚氏は、通訳業務について次のように述べている。なお、読みやすくするために旧字体は新字体に変更した⁵⁸⁾。

「両者の智識、専門等が、同等か或はそれに近い場合、其の間に立つての通訳の業務は、非常にスムーズに行くが、然らざる場合、特に一方或は双方が気が短いか、感情が激しいとかの場合、其の鋒先は必ず通訳者に向けられ、又其の原因は実に通訳の未熟不手際に帰せられる場合も往々にしてある。

また、上級者の通訳として下級者に臨む場合は、通訳者自身も権力を持った様な錯覚に陥るし、反対

56) JO氏，2008年8月7日，2010年8月2日。

57) MK氏，2010年8月11日。

58) 『時報いばちんが』については、長谷川（2009：49）を参照のこと。鈴木厚氏は1912年東京生まれ。ブラジルに渡り、1936年にマッキンゼー大学を卒業して電気工学の技師になる。その後日本に一旦帰国するが、再びブラジルに渡り、リオデジャネイロのヤマガタエンジニアで働いた後、ウジミナスに入社した（“Homenagem aos pioneiros nikkeis da Engenharia”（2008），p.16）。

に、下級者の通訳として其の上級者に臨む場合は、何うしてもコンプレックスを感じる。時には、通訳の方が依頼者よりも事情に通じておる事も有り得る。

此の場合、依頼者の間違、或は非を知りつゝも、此れを相手に其のまゝ伝えるのこそ機械たる所以在り乍ら、忠言出来ぬ立場、状況下に在る場合、此れを押え耐えるのは良心的に苦しい事でもある。通訳内容の元々の間違いを、通訳のミスと得てして考えられ勝ちであるが、此の場合、これが通訳になじられれば、益々通訳はそれの弁明をせざるを得なく成り、結局は、自然機械に成り切れぬ様にし向けられておる結果となる。

会議の通訳とも成れば、各メンバーは、発言の際のみ緊張すれば事足りる場合もあるが、通訳ともなると、ネジは掛けつ放し、数時間に亘る会議の初めから終りまで、緊張の連続で、カフェーゲンニヨを飲む時間もあらばこそ、人によつては、ストレス過剰とも成り得る。又こういう事もある。生じつか言葉が出来る為に、或る方面の専門を持つており乍ら、専門外の通訳を命ぜられる場合等で、不幸これに不成功の場合は、其の者自身の専門上の価値まで疑われる。マイナスのケースである。又依頼者にも、上手、下手があり、適当なテンポで句切りつゝ、語られる場合は誠にスムーズに行くが、感情に走つて、通訳中なることを無視して、まくし立てる場合もあり、機械は全波検波不可能となる。またどういう内容か、何の予告無く、急に機械を始動せしめるより、やはり前につて大略の内容を伝え置く事により、おおよそ波長を合はせて置いてからスイッチを入れた方が、機械はスムーズに役目を果たす様である⁵⁹⁾。

ここでは、依頼者よりも通訳者の方が知識が豊かであるケース、依頼者が通訳を使っていることを忘れて暴走するケース、事前準備を与えられないケースなどに相当のストレスを感じていることが吐露され、最高の通訳は自らの意志を捨てて通訳機械になるべきだとされている。この「通訳は通訳機械になるべきだ」との考え方（直訳主義）は、今日では下記の通り通訳者の役割を最も狭く捉えたものとされている。

…より限定的に解釈されたプロ通訳者の役割は、正確、完全、忠実な訳出を行うことが一般的に規定され、どのようなディスコースにおいても通訳者が主導権を握ることを禁ずる。通訳者は「人でない存在」として、対話者間で中立的立場にいる者だと考えられたからである。したがって、専門的で制度的な場において、「通訳者の機能とは一般的に機械と似ており、ある言語での発言を別の言語にほぼ直訳する」という考えが広まっていった。このような機械としての考えから、通訳者の役割を表す「忠実なこだま」「チャンネル」「導管」「転換装置」「伝達ベルト」「モデム」「出入力ロボット」などのメタファーが生まれた⁶⁰⁾。

この直訳主義（通訳機械説）は、他の通訳業務に携わった日系社員による証言にも現れる。第4章第3節で証言を示したHK氏は、以下のように述べている。通訳は責任はあるけど「その通りに訳して伝えればいい」と考えられているので、中身を持っている技術者の方が評価される。ウジミナス退職後、山九の第2高炉の改修工事の通訳を務めたが、その時も「当たり前

59) 鈴木 (1965), 7-8頁。

60) ポエヒハッカー (2008), 178頁。

のことをやっている」感覚だった⁶¹⁾。

この直訳主義（通訳機械説）は、通訳を依頼する側にも通訳する側にもあって、通訳業務の過小評価につながったと考えられる。「その通りに訳して伝えればいい」とするのが通訳業務の過小評価だとすれば、日系社員は通訳として「通訳機械」以上の役割を果たしたことになる。では、その「通訳機械」に含まれない「役割」とは何か。

3 文化の仲介者としての通訳

日系社員が「通訳機械」に含まれないが、通訳として果たさなければならなかった「役割」とは何か。ブラジルの大学を卒業した日系技師のIY氏はこう述べている。二世としては日本人の心持ちもわかる。通訳をする上で、相手を傷つける言葉は使わないようにして、別の言葉に言い換えて意味が通じる程度に通訳していた。ケンカ腰で言われた時でも、質問として扱うこともあった。ブラジル人と日本からの派遣者が言い争いに出くわした時に、派遣者から「オレの言いたいことを通訳してくれ」と言われたが、冗談めかして「ケンカの通訳はしませんよ」と言ったこともある⁶²⁾。

1924年サンパウロ州リンスに生まれ、日本の高等教育を受けた後、1949年に渡伯し、土木技師として働いていたところ、ウジミナス側の要請で1958年6月に入社したHS氏はこう語っている。工場内では日系人が通訳の役割を果たしたが、単なる通訳では済まなかった。専門用語に通じる必要があっただけでなく、文化の違いを考慮して、仲違いにならないように言葉を選んで通訳する必要があったからである⁶³⁾。

1969年に入社した日系二世の事務員MS2氏はこう述べている。「いかにケンカにならないように一緒に仕事できるように、双方の考え方や心を伝えないといけない」。「通訳はその人の心を理解しないといけない。二世は日本の文化とブラジルの文化の両方がわかる。双方の文化を理解しないと通訳はうまくいかない」⁶⁴⁾。

1935年生まれ、1957年に渡伯、1962年にウジミナスに入社し、作業員として動力部のラボに配属されたKW氏はこう述べている。通訳は「間に立つ仕事」。日本からの派遣者が言った通りに伝えていいのか。例えば怒って「バカヤロー」と言った時、それをどう通訳するか。きちんと考慮しないとケンカになってしまう⁶⁵⁾。

これらの証言からわかることは何か。第1に通訳者が「通訳機械」に徹していたら、通訳を依頼した両者（日本語話者とポルトガル語話者）の間での感情的な対立や言い争いになりかね

61) HK氏、2010年9月6日。

62) IY氏、2006年8月28日、2008年8月9日。

63) HS氏、2006年6月14日、2008年8月19日。

64) MS2氏、2010年8月10日。

65) KW氏、2010年8月18日。

ない通訳場面が少なからずあったことである⁶⁶⁾。これは、互いの意図や期待が衝突を起こしてしまい、通訳者が「仲介者」として、理解の進展を取り仕切る当事者として行動を取らざるを得ない場面と言えよう。より深刻な場合には、コミュニケーションを可能とするという通訳者の使命がかかってくるので、何らかの形の仲介的介入が求められるだろう⁶⁷⁾。第2に、彼らはそうした感情的な対立や言い争いを回避するため、通訳をする際、日本とブラジルの両文化をふまえて、その間に立って言葉遣いに細心の注意を払い、別の言葉に言い換えるなどしていたことである。このふるまいは「通訳機械」のそれではなく「仲介者」、理解の進展を取り仕切る当事者のそれである。

この「仲介者」が仲介する2者は、直接的には通訳を依頼した日本語話者（日本からの派遣者）とポルトガル語話者（非日系ブラジル人社員）であるが、それぞれが代表する日本の文化とブラジルの文化でもある。この点において、その間に立つ通訳を行う日系社員は「文化の接点（cultural interface）」であり、「文化の仲介者、つまり、文化同士が出会い、共存し、お互いに調和することを可能にし、具体化する仲介者」⁶⁸⁾であろう。この「文化の仲介者」が「通訳機械」に含まれない日系社員の「役割」である。なお、第2章で明らかにしたように文献では「トラブル時のとりなし役」も日系社員の役割とされていたが、これも彼らが「文化の仲介者」であることの表れとみなすことができる。

4 小括

本章の目的は通訳業務上の困難はいったい何であり、それにどのようにバイリンガルによる通訳（訓練なしの通訳・素人通訳）としての日系社員が立ち向かったのかを明らかにすることであった。

第1節では、通訳にあたって事前準備の時間が与えられなかったケースが少なからずあり、通訳者が事前準備が十分にできないという困難があった。この困難をもたらした背景には、先述の通訳不足とともに「準備なしでも通訳はできるであろう」との通訳に対する過小評価があったとした。第2節では、その過小評価は「その通りに訳して伝えればよい」という直訳主義的通訳観（通訳機械説）と結びついていたことを明らかにした。第3節では、日系社員は「通

66) MS2氏、2010年8月10日。感情的な対立や言い争いが現場でどの程度発生していたのかは不明であるが、それが珍しいことではなかったことはMS2氏の以下の証言から推察される。MS2氏は1976年の厚板工場のスタートアップ時に、日本の設備メーカーから派遣された者がモンキースパナでブラジル側（作業長）を殴ろうとして他の者が仲裁に入ったところを目撃した。あるいは、日本からの派遣者が作業員相手に「馬鹿野郎」とどなったら、通訳に言われたと勘違いして、その通訳が怒りだした場面にも立ち会ったことがある。MS2氏は各部署から次々に呼び出され、シャーラインで仲裁に入り、加熱炉で仲裁に入り、熱処理で仲裁に入り、という状態だった（MS2氏、2010年8月10日）。

67) ポエヒハッカー（2008）、67頁。

68) ポエヒハッカー（2008）、68頁。

訳機械」に加えて「文化の仲介者」，すなわち，日本とブラジルの文化が出会い，共存し，お互いに調和することを可能にし，具体化する仲介者としての役割も果たさざるを得なかったことを明らかにした。

以上より言うことは以下の通りである。日系社員は，バイリンガルによる通訳（訓練なしの通訳・素人通訳）であるにも関わらず，事前準備の時間が十分に与えられないなどの不利な条件と直訳主義的通訳観（通訳機械説）からくる過小評価に晒されながら通訳業務をやらざるを得なかったが，日本とブラジルの文化の間に立ち，両者を共存・調和させる「文化の仲介者」でもあった。

VI おわりに

本稿の課題は，ウジミナス建設期・操業開始期に日系社員がどのような役割をどのように果たしたのか。これが文献でどのように記述されているかを明らかにし，文献上では最も言及されている通訳者としての役割について，そのありようを明らかにすることであった。

Ⅱにおいては，下記のことが明らかとなった。文献上ではウジミナス建設・操業開始期当時の日系社員は，まずは通訳者・翻訳者の役割を果たしたとされ，その他に指導の仲介役，トラブル時のとりなし役，日系の工長・作業員は現場でのモデルといった役割を果たしたとされている。ただし，技師として活躍した日系社員があったが，技師に限らず日系社員が与えられた役割をどのように果たしたのかは明らかでない。

Ⅲにおいては，当時，日本側とブラジル側に共通する言語がなく，日本側の派遣前のポルトガル語教育も業務を行うには不十分であり，派遣後もポルトガル語学習の機会が乏しかったため，通訳者が必要とされたと考えられるとした。

Ⅳにおいては，下記のことが明らかとなった。ウジミナスは，プロの通訳者を雇用しようとしたが，ウジミナスが遠隔地・地方にあったために思うように採用できなかった。そのために，不足していた数少ない貴重なブラジルの大卒日系技師に通訳を兼務させることは，ウジミナスにとって苦渋の選択であったが，彼らは日系技術員とともにプロの通訳者並みに働かざるをえなかった。

Ⅴにおいては，日系社員は，訓練なしの通訳であるにも関わらず，事前準備の時間が十分に与えられないなどの不利な条件と直訳主義的通訳観（通訳機械説）による過小評価に晒されながら通訳業務をやらざるを得なかったが，日本とブラジルの文化の間に立ち，両者を共存・調和させる「文化の仲介者」でもあったことが明らかとなった。

以上より，言うことは以下の通りである。ウジミナス建設期・操業開始期におけるプロの通訳の不足を補うために，貴重なブラジルの大卒日系技師が通訳に動員された。技師以外の日系社員については，募集時からバイリンガル（による通訳）としての活躍を期待されていた

とはいうものの、日系技師と同様に、プロの通訳不足と通訳業務の過小評価がもたらした困難な条件で通訳をせざるをえなかった。こうした困難な状況にあったにもかかわらず、日系社員は通訳として日本とブラジルの文化の間に立ち、両者を共存・調和させる「文化の仲介者」としての役割を果たした。

※本稿は、平成22年度関西大学在外研究、および科学研究費補助金(課題番号22530342)による研究成果の一部である。

参考文献

- 阿南惟正 (1962) 「井上製鐵所長マリリア, リンス両市訪問」『時報いばちんが』第24号, 1962年5月10日付, 5頁。
- 阿南惟正 (2007) 『鉄の絆: ウジミナスにかけた青春』朝日新聞社。
- ブラジル日本移民70年史編纂委員会 (編) (1980) 『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会。
- 井上義祐 (2001) 「鉄鋼業の高度成長を可能とさせた八幡製鐵所の一大教育プロジェクト(2)」『桃山学院大学経済経営論集』第43巻第2号, 99-137頁。
- 中川靖造 (1974) 『ウジミナス物語』産業能率短期大学出版部。
- 中川環 (1997) 「発刊にあたって」ウジミナス回想録編集グループ (編) 『ウジミナス回想録』, 頁番号記載なし。
- 中村弘 (1997) 「ウジミナスでの仕事の思い出」ウジミナス回想録編集グループ (編) 『ウジミナス回想録』, 119-120頁。
- 日本ウジミナス五十年のあゆみ編纂委員会 (編) (2008) 『日本ウジミナス五十年のあゆみ: 鉄は日伯を結ぶ』日本ウジミナス株式会社。
- 日本ウジミナス株式会社 (編) (1969) 『十年史』。
- 長谷川伸 (2002) 「ウジミナス建設プロジェクトと技術移転」『関西大学商学論集』第47巻第1号, 85-118頁。
- 長谷川伸 (2009) 「ウジミナス建設・操業開始期における日系社員の採用」『関西大学商学論集』第54巻第2号, 47-68頁。
- 長谷川伸 (2012) 「日系二世・戦後移民はなぜウジミナスへ入社したか」『関西大学商学論集』第57巻第2号, 43-59頁。
- フランツ・ポエヒハッカー (2008) 『通訳学入門』(鳥飼玖美子監訳) みすず書房。
- 武末浩之 (1997) 「わがブラジル」ウジミナス回想録編集グループ (編) 『ウジミナス回想録』, 135-136頁。
- 鈴木厚 (1965) 「機械に成ろう」『時報いばちんが』第48号, 1965年9月30日付, 7-8頁。
- 植村治 (1997) 「ポルトガル語の思い出」ウジミナス回想録編集グループ (編) 『ウジミナス回想録』, 79-80頁。
- ウジミナス回想録編集グループ (1997) 「ウジミナス小史」ウジミナス回想録編集グループ (編) 『ウジミナス回想録』, 15-54頁。
- 「ミナス要員大挙渡伯, 26日体育館前広場を出発」『くろがね』1367号, 1961年11月15日, 1頁。
- 「ウジミナス採用日系職員紹介(1)」『時報いばちんが』1961年9月10日付, 4頁。
- 「ウジミナス操業近し」『サンパウロ新聞』1961年11月4日付, 1頁。
- “Homenagem aos 100 primeiros engenheiros nikkeis formados no Estado de São Paulo.” *Jornal do Instituto de Engenharia*. ano V. outubro 2008. p.28. <http://ie.org.br/site/ieadm/arquivos/arqjornalie26.pdf>. Viewed on 25 July, 2013.
- Usiminas, Assessoria de Comunicação Social (1990). *Usiminas conta sua história*.

聞き取り記録ほか

FK氏からの聞き取り，イパチンガ市，2002年3月13日。

FK氏からの私信，2015年9月17日。

HK氏からの聞き取り，ペロオリゾンテ市，2008年8月20日，2010年8月26日。

HS氏からの聞き取り，ペロオリゾンテ市，2006年6月14日，2008年8月19日。

IY氏からの聞き取り，ブルマジーニョ市，2006年8月28日，2008年8月9日。

JO氏からの聞き取り，ペロオリゾンテ市，2008年8月7日，2010年8月2日。

KT氏からの私信（電子メール），2015年3月30日。

KW氏からの聞き取り，イパチンガ市，2010年8月18日。

MI氏からの聞き取り，ペロオリゾンテ市，2010年8月6日。

MK氏からの聞き取り，イパチンガ市，2010年8月11日。

MS2氏からの聞き取り，イパチンガ市，2010年8月10日。

TB氏からの私信（電子メール），2015年4月11日。

TK氏からの私信（電子メール），2015年3月2日，2015年3月4日。

元新日鐵技術協力事業部専門部長・K氏からの聞き取り，2001年11月26日。